

引越しの弁

津守 真

本年の三月末で、私はお茶の水女子大学教授を辞めることになった。人が職をかわるのは、普通にあることで、別段とりたてて変わったことでもないはずだが、理由に興味をもたれる方が多いので、一言、記させて頂きたいと思う。公的な性格の雑誌に、個人的なことを記すことにためらいもあるが、なかく編集主任をしていたので、進退の理由を明らかにするつとめもあると思ひ、敢て記す次第である。

私は、大学を卒業して間もないころ、恩賜財団母子愛育会愛育研究所で、研究員をしていたが、教育相談で知恵おくれの幼児の相談にあずかったのがきっかけで、当時、知恵おくれの幼児のための幼稚園は皆無だったので、研究部長であった牛島義友先生の研究室を開放して頂いてこの子どもたちの保育を担当することになった。私が倉橋惣三先生と知り合うようになったのも、この仕事を契機としており、私がこの雑誌にはじめて文章を書かせて頂いたのは、昭和二十五年六月号で、「幼児教育と特殊教育」と題して、この仕事のことを書いたものである。

その後、私はお茶の水女子大学に奉職することになったが、ひきつづき、愛育研究所の非常勤研究員として、知恵おくれの幼児の保育室の実際と研究に参与してきた。この保育室は、後に養護学校に発展したのであるが、最近、養護学校が義務化され、種々の外的事情も加わって、長くこの仕事に参与してきた私が校長をひき受ける特別の必要を生じた。私は大学でも保育学を担当する者であり、教授と兼任できると思っていたが、文部省の方針では、国立大学教授は、校長や病院長、博物館長などの職との兼任を承認しないということであり、私はいずれかを選ばねばならなくなった。いろいろと迷ったが、私は、保育の現場の実践と表裏をなす研究を志す者であり、愛育養護学校長に就任することにした。大学の同僚、後輩、学生への迷惑を考えると、何と云ってよいかわからないが、これは善悪、是非をこえた運命のようなものだと思う。

障害をもった子どもの保育というと、普通の保育と違うと思われることがある。具体的には違うこともあるけれども、子どもの見方や保育の根本は共通である。むしろ私は、これは保育の原点にある仕事だと思っている。引越しをしても、私は従来にひきつづいて、一層広い視野に立って、保育学の学徒として歩みたいと思っている。